◎中学生の部

その他の良い作品

引っ越してきて良かった素敵な街羽生

南中学校　一年
安部　雛花

なんとなく　私にとって　嬉しい日
なんとなく　私にとって　心の沈んだ日
少し遠まわりして
通りたくなってしまう
近所の陸橋

うちの犬と一緒に
散歩をしに行った陸橋
体力をつけるために
一生懸命坂道を走った陸橋

登りきったてっぺんで
見渡す羽生の街

夕焼けのやさしいオレンジ色に
つつまれて
遠くまで広がる
たくさんの田畑と家々

陸橋をくぐり抜けて
まっすぐ　まっすぐ
走って行く　東武線

すべての色がやさしく
すべての音がやさしく

がんばれ！
そう言われている気がする
なんでもない日々だけど
一日一日が大切な毎日で

私は　この街とともに
育っていく

やさしい　素敵な街につつまれて

ふるさとを照らす太陽

南中学校　三年
川島　彩

窓から差し込む太陽の光
いつもの一日が始まる

通学路に咲く花は
その光に向かってのび続けている
「儚い」ふとそう思う

学校の門をくぐると
大きな木の葉が日に照らされ
光と緑の色彩が
気持ちをさわやかにする

「おはよう」「またね」
そう声をかけてくれる友の笑顔は
太陽のように明るく眩しい

帰り道、最後まで私達を照らす夕日は
「また明日」
そう言っているかのように沈む

ふるさとを照らす太陽は
明日もまた昇る

中学生になって

東中学校　一年
小針　結花

小学生の時とちがう景色
歩きと自転車だと
景色ってこんなに変わるんだ
歩いているとゆっくり
景色が見れる
自転車だと速くて
気持ちが良い風が感じられる
たくさんの景色が見れる
小学生と中学生
同じ道を通っても
ぜんぜんちがう景色
その時その日その時間だけの景色
小学生の時より風が強くて
大変だけど夢に向かって速く
進んでいける
雨が強くても風が強くても
一歩ずつ
一歩ずつ進んでいく
歩きよりつかれるけど
速く速く進んでいく
夢に向かって

愛犬と一緒に

南中学校　一年
田口　夏鈴

三年生のころに小さな犬が家にきた。
その犬は一瞬で私の心をつかみとった。
小さくて、毛がうすくて、細い。
毛は真白で、雪のよう。
初めは大人しかったくせに。
すぐに家になれて走りまわる。
白い毛には点々と、茶色い模様までつけて。
大きく大きく成長した。
心も体も、大きく育つ。
うすかった毛はもさもさしはじめた。
すこしさわっただけで毛玉が飛ぶ。
つめは伸び、顔つきもかわった。
小さいころよりもかわいくなったかもって、
私は思った。
見つめていると大きくぬれた目を向けてくる。
小さな鼻はいつも動いている。
しっぽは、ふさふさの毛で包まれている。
いつのまにか、飼ってから四年たっていた。
もっとゆっくりかと思ったのに。

気がつけば、私は愛犬のシャンプーや
ご飯など、自分でやっていた。
愛犬だけでなく、私も成長していた。
あんなに小さかったのに、こんなにも
大きくなった。
同じだったんだ、成長していたのは。
愛犬も私も、四年という長そうで短い時を、
たっぷり使って、成長していたんだ。
弟だって、気がつけばもう三年生。
人生ってこんなにも早いことが分かった。
だから、今を大切に生きなきゃいけない。
愛犬が気づかせてくれた。
こんなに短いものだってことを。
こうかいなんてしたくないから、
今できること全てを本気でやりたい。
一生けん命ではなく、本気でやる。
これからも、愛犬と一緒にすごしていきたい。
命が消えるその日まで。
この空間を、時間を大切に。

四季折々の川

東中学校　二年
千葉　咲綾

この家に住みはじめたときから
ずっと近くを流れている川
季節によって
全く違う顔を見せてくれる

春はおだやかにゆっくりと流れて
新しい学年へと変わり
とまどう私の心を落ち着かせてくれる
夏は水の量も増えて
勢いよく流れて
暑さで動けなくなる
私の体を後押ししてくれる
秋は色とりどりの葉が流れて
いつもの変わらない風景に
色どりを与えてくれる
冬は流れが止まりそうになり
がんばれと
川を応援したくなる
川は誰かのために
一年中休むことなく
流れている
私も川のように
何かのために
一年中がんばれる
そんな人になりたい

病

南中学校　一年
鳥居　桜花

祖父は戦っている
黒くて　危険な　闇と
戦いは長く続いていた
たまに、いっしょに戦った
相手は強い
負けそうになってもあきらめない祖父
負けそうになったら助ける家族
そんな日が続いたある日
祖父は負けた
私がお出かけしていたときに
大量の水が目からあふれる
あたたかかった祖父にふれる
氷のように冷たかった
ボロボロになった祖父の体を家族とふく
静かにねむる祖父
水がかれるころには祖父は光の方へ
家族といっしょに見た祖父の最後の姿
小さいころにきざまれた　一ページ

通学路の大きな木

南中学校　三年
干場　萌

私の通学路にある
大きな木
毎日通るはずなのになぜだろう
通るたびにまるでそこに
違うものがあったかのように
雰囲気が変わる
悲しいことがあった日は
私をなぐさめるようにゆっくりゆれる
楽しいことがあった日は
私と一緒に楽しむように激しくゆれる
まるで私の感情が見えているように
光があたってキラキラと輝く緑の葉
その一枚一枚が
私の心をうつし出しているのだろうか
あの木の前を通ると
なんとなく明るい気持ちになれる
だから私は今日も
あの大きな木の前を通る

おばあちゃん

東中学校　三年
矢吹　桜楽

会いたいなぁ。
時々浮かぶあの優しい笑顔。
小さい時、遊びに行くといつも作ってくれたうどん。
抱っこしてくれた太くて優しい手。
ゆっくりと優しいしゃべり方。
どれもずっとずっと忘れない。
私の大切な思い出。
もしかしたらおばあちゃんが危ないかもしれない。
それからすぐに天国へ行ってしまった。
私は信じられなくて涙も出なかった。
もっともっと一緒にいたかった。
色々な場所に行きたかった。
沢山話しがしたかった。
私の成人式の振袖姿も見てほしかった。
もう一度あのうどんが食べたかった。
おじいちゃんがとっても淋しそう。
もっと長生きしてほしかった。

思い出すとやっぱり涙が出てきてしまった。
人ってみんな最後は天国へ。
そしたらおばあちゃん、
また一緒に遊ぼうね。